

# 第6次絶滅 不自然な歴史

エリザベス・コルバート

ブランカ・ヴァン・ハッセルト

生命の起源は海にある。ダーウィンやウォレスが言うように、恐竜や人類の祖先を含む哺乳類は皆、魚や三葉虫などの海の生物から進化したのだ。しかしダーウィンの「適者生存」説は、動植物の緩やかな進化と新しい種の発生のみに着目し、種の消滅、特に突然の消滅については何も触れていない。実際、過去500万年の間に大量の種の絶滅が2、3度起こったことが、地理的、古生物学的に証明されている。最もよく知られている恐竜の絶滅は、白亜紀の終わりに起こった。原因は、現在のメキシコ湾辺りに落下した巨大隕石である。その激突の衝撃により、舞い上がった大量の粉塵が空を覆って日光を遮り、地球は冷え込んだ。こうした気候変動により、恐竜とその同時代の生物は絶滅したのだ。

「第6次絶滅」の中で、エリザベス・コルバートはいかに生命が進化したかというより、いかに消滅したかについて考察している。第1章では、パナマで行われたカエル、ヒキガエル、その他の両生類の救済活動をレポートして、世界中のいたるところで、両生類がキノコに冒されて急速に消滅している実態を訴えている。続く章では、鳥、こうもり、サイの生息状況について、研究者と環境保護運動家のチームの調査を紹介している。更に彼女はオーストラリア・グレートバリアリーフでの自らの調査結果を報告している。サンゴ礁が、色々な海の生物に棲み家と食べ物を供給し、それらと完全な共生をしていることがよく分かる。

気候変動と地球温暖化についての一つの問題は、大気中の二酸化炭素が海水に溶け込み、海水が酸性化することである。コルバートは、ナポリの西、アラゴネーゼ城の沖の、海中の二酸化炭素噴出孔近くの動植物を研究するチームに参加した。これらの噴出孔は、ベスピオ山とエトナ山の火山活動と連動している。噴出孔から離れたところでは、海水のpH指数は正常で、魚類・貝類・海藻類の種類も量も標準的である。しかし噴出孔に近づくにつれて、海水はだんだん酸性化し、生物の種類や数が少なくなる。更に近づく、生き残りの甲殻類は、殻が薄くなったり、穴が開いたりして、中の動物は無防備になっている。これが二酸化炭素噴出孔近くの実態である。将来、産業活動から排出される二酸化炭素の海水に溶け込む量が増え、地球規模で海水の酸性化が進むと、海の動植物相はどうなるだろうか。

そう、私達は大量な種の絶滅の時代に生きている。それはいつ始まったのだろうか。私達の祖先が1万5千年前にマンモス狩りをしてきたことは化石が証明しているし、近代ではドードーやモアも捕り尽してしまった。

しかし、狩りが種の絶滅のただ一つの原因ではない。人類はアフリカで出現して、穀類や家畜と共に移動して、世界中に広がっていった。新しい土地に持ち込まれた動植物は、天敵がない新天地で、土着の動植物を凌駕、駆逐した。例えば、オーストラリアへ持ち込まれたウサギや、ヨーロッパへもたらされたカニは、ある種の原住動物のえさになるものを食べ尽くして絶滅に追いやり、世界中で多くの外来の雑草が原生の灌木に取って代わった。近代では、農業や住宅地の拡大により、多くの種類の植物が消滅している。この第6次絶滅は、否定のしようもなく「人間の時代（人間の活動が地球に深刻な影響を与えている時代）」の産物である。しかし一体「人間の時代」はいつ始まったのだろうか？産業革命以前だろうか？我々の祖先が必要以上に狩りを始めた時からだろうか？人間が農業を始め、どんどん繁殖して、自然環境と釣り合わない生活をするようになった時だろうか。いや、そもそも「人間の時代」は有史以前からすでに始まっていたのかもしれない。

コルバートは、ヨーロッパに行くとネアンデルタール人の人類学研究者に会った。DNAの研究は、人類がその直流の先祖とネアンデルタール人との混血であることを示唆している。少なくともヨーロッパ人とアジア人においては、約4%の遺伝子がネアンデルタール人のものと一致する。ネアンデルタール人は、マンモスとマストドンと共に、有史以前にこの地球上から姿を消している。彼らの絶滅もまた「人間の時代」の犠牲なのかもしれない。コルバートが引用する研究によると、人類のDNAはネアンデルタール人のDNAとはわずかに違う。その違う遺伝子は「狂気」の遺伝子なのだろうか？その遺伝子は、人類を自然とのバランスを欠く生活へと導いてきたのだろうか？しかしその遺伝子は、人類を色々な境界に挑ませ、地上を、大海原を、そして宇宙にさえ、その活路を拡大させてきたのではないか？その遺伝子は、人類に様々の疑問を抱かせ、社会や文明を築かせてきたのではないのか？この本は非常に興味深く、小説のように読める。しかし読後は深刻で不安な気持ちにならざるを得ない。

訳: 神村伸子 (Nobuko Kamimura)

